

内科・糖尿病内科

担当医師 井口昭久教授

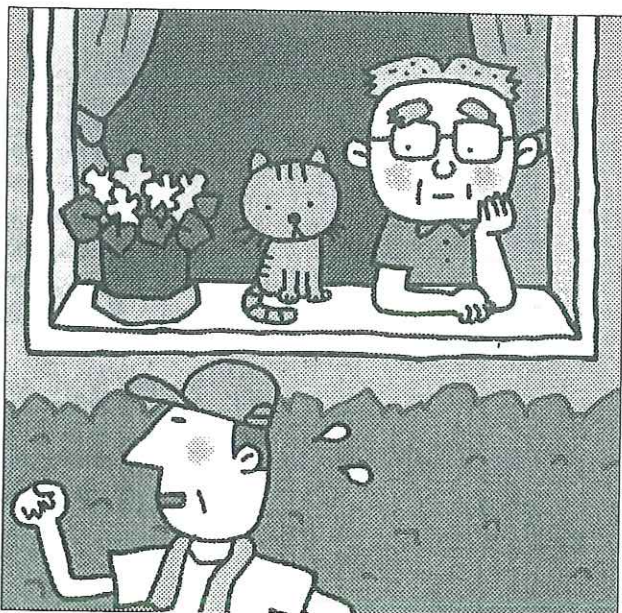
の記事が掲載されました。

7月11日 朝日新聞 朝刊

(毎月1回掲載中)

老年学

散歩に出てみたが



The Asahi Shimbun

Sさんは78歳で糖尿病を患っている。76歳の妻と15歳の雌猫と暮らす。半年前までは犬もいた。午後6時に夕食を食べる。8時ごろに風呂に入ってからベッドに入る。午前1時ごろに目が覚めるが、それから寝付けない。友人が心筋梗塞で死んだことなどを思い出す。うつらうつらして、5時ごろになると妻が起きてくる。猫が布団に入ってきて顔をなめる。猫も早起きだ。

夫婦は、犬が生きていた頃は一

愛知淑徳大学教授
医師

井口 昭久

緒に散歩をしていたそう。だが犬がいなくなると散歩はしなくなった。心配した妻に強要されて散歩に出掛けたことがあった。最近の妻は、リウマチで朝は調子が悪いので一緒に歩いてもらえない。

早朝、散歩をする人たちのほとんどは帽子をかぶり、そろって運動靴をはいている。手をつなぐわけでもないが、夫婦で散歩をしている。腕を振って早足で歩いている。ある時、Sさんが1人で散歩をしていると、老人が窓から眺めていたそう。同じような早起きの老人だ。朝の散歩でも目が気になる。「あの窓から自分を見ている老人は、犬を連れていない自分を『徘徊老人』とみているに違いない」。Sさんはそう確信してしまったという。

結局、Sさんは「早朝の散歩をやめてしまった」と糖尿病の主治医に言っている。代わりに最近では、猫と一緒に窓から散歩する人を眺めているのだという。